

英国における標準英語の形成と国民国家

The Creation of Standard English in the U.K. in terms of Nation Building

佐藤 秀樹*

Hideki SATO

はじめに

今世界中を英語が席卷している。英語を母語とする人口は現在約3億7500万人とされているが、第2言語とする人口がほぼ同数あり、外国語として英語を話す人々はそれら2つを合わせた数に匹敵すると推定されている。地球上の全人口を約70億とすると、その五分の一以上が何らかの形で英語を使っていることになる¹⁾。また近頃のグローバリゼーションの加速化にともなって、英語が世界のビジネス界の共通言語になりつつあり、日本でも英語を社内公用語にしようという企業がでてきている。そのため英語力が就職や昇進に大きな影響を与えるようになってきた。これまでも各国の外国語教育の中で英語は大きな位置を占めていたが、その傾向はますます強まり、同時に公立学校での英語学習開始年齢が早まっている。我が国においても、2003年に文部科学省が「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」を策定し、その後小学校において英語教育を義務化した²⁾が、さらに低年齢化を計画している。また近年はインターネットやスマートフォン、タブレットなど遠隔コミュニケーション手段の普及が急速に進んでいるが、インターネットにおいては全世界のホームページの使用言語の80パーセント以上が英語である (McRum, p.5)。

ところで、高等教育の質が世界で最も高いのはアメリカ合衆国と英国であるということがますます世界の「常識」になりつつある。最近発表された英国『タイムズ』紙の世界大学ランキングのトップ20位の

うち18校が英米の大学である³⁾。ランキングを判定するための基準の一つに国際化という部門があるが、そこではどれだけの学生が世界中から集まっているかということが指標のひとつとなっている。世界で通用性の高い言語を用いて教育する大学が世界中から学生を集める上で有利であることは、一見するだけでも分かる。また権威が高いとされる学術雑誌の多くが英語であるため、非英語圏の学生が英米の大学で学位を取り、また多くの非英語圏の研究者が英米の大学に職を求めるという循環が生まれることになる。そうした大学に対抗するために、非英語圏の大学では英語で講義を行うところが増え、中には英語だけで学位が取れるところまで現れている。

日本においてもこうした世界の時流に遅れないようにと、小学校から大学まで英語教育の強化が声高に叫ばれ、奨励されている。この傾向は世界中のどこでも似たり寄ったりである。ついには、英語が現代世界における「デフォルトな言語」 (McRum, p.12) になっていると考える言語学者も現れている。そのような考え方は今に始まったわけではない。『オックスフォード英語大辞典 (第2版)』編集主幹という極めつけの英語専門家であるR.W.バーチフィールドが次のように述べている。

「英語はまた、地球上のいかなる教養人でももし英語を知らなければ真の意味では恵まれているとは言えないほどにリンガ・フランカ化している。貧困・飢餓・疾病は、残酷きまわる弁解の余地のない窮乏・

*企業情報学部教授

欠陥としてすぐわかる。言語上の欠乏はそれほどには目立たぬ状況ではあるが、それでも重大な欠乏ではある³⁾。」

ここでは、英語を知らないことが貧困・飢餓・疾病とほぼ同列に並べられ、非英語圏の人間を不安にさせる。バーチフィールドは言語学では記述主義の立場に立っており、必ずしも保守的であるとは言えないが、無意識のうちに言語をランクづけし、最高ランクに英語を位置づけた上で、その高みに立って語っていることは否定できない。このような考え方が代表的な言語学者の一人からあるということは、広く英米の社会にこのような考えが広がっていると考えても良いのだろうか。また、アメリカではもっと直截に英語の役割を述べた政治的な発言もある。

「世界が共通言語に向かいつつあるとしたら、その言語が間違いなく英語になるようにすることは合州国の経済的、政治的利益になる。もし世界が共通の遠隔コミュニケーション、安全、品質基準に向かいつつあるとしたら、それらがアメリカのものであるようにすること、また共通の価値が開発されているとしたら、アメリカ人が満足できるものであるようにすることが合州国の利益になる。これらのことは根拠のない願望ではない。英語が世界をつなごうとしているからである⁴⁾。」

この発言において、英語は直接にアメリカ合州国の経済的、政治的利益と結びつけられている。その点をふまえて、高等教育の英米化、英語の国際共通語化（リンガ・フランカ）を見ると、英語の普及が政治的に中立の現象、いわば優れた文化をとまなう言語（＝英語）が自然に世界の人々に受け入れられて、拡大普及するという観点から見られなくなるのではないだろうか。

英語がイデオロギー的に「中立」⁵⁾で「柔軟」（Crystal, p.1）であるために世界中に普及したと考える言語学者もいる。世界に英語が広がることはよいことで、英語は世界共通語になり、世界中の人々が自由に交流できることになるとの楽観的な見通しを述べる研究者もいる（McRumを参照）。一方、このような見方に鋭い批判を加えたのがロバート・フィリップソンの『言語帝国主義』である。フィリップソンは、アメリカ英語・イギリス英語を世界に広がっ

ていくことはよいことであるという考え方の底には、言語に優劣をつける言語差別主義（Linguicism）が潜んでおり、英語を世界共通語として広めようとする姿勢は言語帝国主義的であると批判した。またフィリップソンは、英語帝国主義⁶⁾を「英語の支配が英語と他の言語間の構造的文化的不平等の構築と継続的な再構成によってうち立てられ維持されること」（フィリップソン邦訳51～52頁）と定義している。そして英語帝国主義は、文化帝国主義と連動しながら、英米を中心とする西洋世界が高等教育、科学研究を独占し、またアジア・アフリカ諸国に対するヘゲモニーを維持させていくために機能していると論じる。『言語帝国主義』は言語学、言語教育の分野を中心に大きな反響を呼び、厳しい批判も受けることになった。マルクス主義の立場からは、「言語帝国主義」という用語を用いることで、さまざまな問題が言語における問題へと単純化されることになり、資本主義がもたらす富の不平等な分配と貧困、経済的帝国主義などを覆い隠す危険性があるという批判がなされた（Holborow, p.77）。また別の方向からの批判は、フィリップソンの説の背後には英語教育者がもつ植民地支配の歴史に対する罪悪感とロマン主義的な絶望感があり、英語支配に対する抵抗や反発が十分に取上げられておらず、旧植民地の母語使用者は支配を一方的に受けるだけの受け身の存在であり、改革への主体という契機がこの観点からは生まれようがないというものである（例えばDavies）⁷⁾。両者の批判にはそれぞれ首肯する点もあるが、どちらも西洋世界の言語を通したヘゲモニーの維持強化というフィリップソンの主要な論点について批判しているものではない。

そこで本稿では、基本的にはフィリップソンの立場に立ちながら、『言語帝国主義』では取り上げられていない19世紀までの英国国内における英語の展開を標準英語と国民国家の形成という観点から素描したい。『言語帝国主義』第5章においてフィリップソンは19世紀から20世紀初頭にかけての英国植民地への英語の拡大・浸透とその言語的遺産について説明しているが、そこでは植民地に「どの英語が持ち込まれたのか」ということは問題にされていない。アングロ・サクソンの部族言語として出発した英語は、後にブリテン島に侵入してくる民族との戦いや接触を通して変化していった。そのため変化が激しく、方言も多彩で、現代の英語母語使用者にも千年前の

英語は全く理解できないほどである。その原因の一つは、近代国家として強大化しつつあったイングランドにおいて、ロンドンを中心とする東部ミッドランドに拠点を置く支配層が文学言語を含む書き言葉を中心に据えた標準英語 (Standard English)⁸⁾ を形成したためである。この英語の標準化 (それはすなわち英語を変化させようとするということでもある) への要請は16世紀後半にはすでに存在したが、植民地への領土拡大が本格化する18世紀から19世紀にかけて標準英語を制定しようという大きな流れが産業資本主義の発達と歩調を合わせるように、強まっていた。その動きは国民国家 (Nation State) の形成と不可分なものであった。またその結果成立した標準英語は排他の論理と差別の論理を内包するものとなったことを明らかにしたいと思う。

1. 中世期英語の展開と東部ミッドランド方言

元々8～9世紀に複数の部族言語 (アングロ・サクソン語) が混じり合っただけでなく変化していったイングランドの言語は、その上に北欧言語、ラテン語、ノルマン・フランス語が重なり、地域方言と階級方言が複雑に入り組みながら分布していくという歴史を持っている。したがって、もともと英語というものがあるという単純な歴史的発展をとげてきたのではないことをまず確認しておく必要がある。11世紀にノルマン地方のフランス語を話す民族の侵略を受けたイングランドに、支配層はノルマン・フランス語を持ち込んだが、被支配層の多くはそれまでの言語を用い続けた。そのため、異なる言語が併存する時期が300年近く続くことになった。その当時の支配階級はノルマン・フランス語を話したが、公式言語はラテン語であり、英語は被支配層だけが用いた。その後フランス軍との戦いに敗れ、ノルマン地方はフランスの領土となったため、支配者たちはブリテン島から出られなくなった。そのため、ゆっくりと2つの言語は融合していくことになる。しかししばらくの間は、フランス語を使い続ける層 (しかしノルマンという基準枠がなくなったために変化の歯止めはなくなっていた) とアングロ・サクソン系の地元言語を使う層が混在したが、徐々に英語が優勢となって、フランス語は英語に飲み込まれていった。またノルマンの王族が維持していた封建制度が変質し、王と貴族の関係が土地に基づく忠誠から、金銭利益に基づく

ものによって変わっていくという社会的変化が起こりつつあった。このことには14世紀中期に猖獗を極めたペストが人口の三分の一近くを奪ったということも寄与した。また地域間の商取引、大学の設立などによって、地域間の流動性が高まっていった (Leith, p.30)。しかし16世紀に多種多様な語彙や表現が統一されることなく使われていたことは、シェークスピア作品の豊かな語彙表現からも推測できる。

標準言語は、言語そのものではなく方言の一種であり、権威付けられ公認された有力な方言である (Trudgill)。社会言語学者デヴィッド・リースによると、標準言語の形成は4つの段階に分かれる。

- (1) ある方言が選ばれる。 (selection)
- (2) その方言が有力で教育のある階級に受け入れられる。 (acceptance)
- (3) その方言の諸機能が精緻化され、どのような目的にでも使えるものとされる。 (elaboration)
- (4) その方言が標準語として成文化され確立する。 (codification) (Leith, p.31)

選出された方言は、オックスフォード、ケンブリッジ、ロンドンをむすぶ三角形をなす地域、東部ミッドランド方言であった。一見して明らかなようにその三角形は、学術の中心と政治・商業の中心をつなぐ地域であり、有力な商人階級が集中して住む地域でもあった。15世紀中期までに、東部ミッドランド方言は公式文書を書く人々の書記基準として広範に受け入れられるようになったが、直筆の手紙や文書では多様なつづりや書記スタイルが併存しており、そのことは特に否定的なことだとは感じられなかった。しかし、同時に当時の庶民の多くは読み書きができず、各地域の方言の中で暮らしていたことを忘れてはならない。14世紀後半に当時の庶民の生活についての物語を書いたジェフリー・チョーサーは東部ミッドランドの商人階級に属していたが、著書の中に自分とは異なる方言を話す人物を登場させており、当時の人々が自分の生活圏でふれあう他の方言を理解していたことを示唆している。

しかし地域方言や階級方言などのまとまりを持つ言語集団は、「不可避免的に特定の社会集団と結びついており、ある社会集団が他の集団より見習う価値があると感じられるように」 (Leith, p.50) なる。チョーサーも属していた商人階級はゆっくりと力を

つけていったが、それにともなって子弟が学ぶ教育機関グラマースクールが徐々に増えていった。中世には大学での教育はラテン語で行われていたが、教育はフランス語を使ってラテン語を学ぶという形式をとっていた。しかし14世紀には英語が使われるようになり、やがてケンブリッジ、オックスフォードの両大学においても英語で講義が行われるようになったが、使用される言語が当然東部ミッドランド方言であったため、いち早く法律や公式文書の言語にはラテン語の混じった東部ミッドランド方言が使用されるようになった。15世紀から16世紀にかけて法律用語を中心にラテン語からの借用語が多数取り入れられ、権威づけが行われた。そのため、書記言語と口語はかけ離れたものになっていったが、両大学で学んだ者にとってはそれを話し言葉に転用することは容易であり、逆にラテン語（フランス語）由来の語彙を交えた書記言語を使って話すことは、他の階級の者と自分を区別する指標として使うことができた。そうした有力方言から見ると、他の方言を使って話したり書いたりすることは、有力階級に入りたいと思っているものにとっては不利な立場に置かれる可能性があった。有力方言を使う言語操作能力を手に入れるためにも、ロンドン近郊の有力なグラマースクールで学ぶことは、有力階級の師弟にとってますます必要になっていった。

そのような英語の歴史的展開の上で、決定的な出来事は1611年の『欽定訳聖書』の出版である⁹⁾。それまでは、一般庶民が理解できないラテン語を用いて宗教活動が行われていたが、この聖書によって統一的な表現と統一的な解釈をどの教区でも使うことが可能になった。このことは、前世紀の「英国国教会」の確立とともに、ローマ法王の宗教権威からの独立と、イングランド王の王権の確立によって決定的な出来事であった。「英国国教会」の最高権威は王（女王）であり、その権威は統一的な言語によって教区の末端まで浸透する体制ができたのである。またこの聖書が宗教教育ばかりでなく読み書き教育の手本となったため、そこで使用された書記言語スタイルは支配層を越えて広がることになった。

2. 国民国家と標準英語形成

標準英語形成と国民国家形成の間にはどのような関係があるのだろうか。国民国家は、近代におけ

る中央集権的国家の発展に伴い、国家間の競争・敵対の激化を通して形成されていったが、中世以前の王権国家・封建国家などと異なり、正統性の根拠を王の血統・家系や神格性に求めるのではなく、「国民(Nation)」という文化概念に置く国家体制である。ここで重要なのは国民と国家という二つの性格の異なる概念の結合である。「国家(State)」は統治体制のことであり、古代から存在したが、「国民」は近代になってヨーロッパに生まれた概念である。この概念は、国境の内側に存在する民を丸ごと「国民」というような存在として包摂する。一つの「国民」は民族的に一体であり、宗教・言語・文化を共有し、同等の権利と義務を負っているとされる。例えば、日本国民は日本民族であり日本語を読み書き話し、共通の文化・慣習を持つと同時に、日本国民である限り同等の権利を持ち同等の義務を負っているという具合にである。また、国家の安定的な統治のためには、国家が独占する暴力による支配だけでは不十分で、国民による一定の同意を必要とする。しかし他方で中央集権の近代国家の国土が中世的な郷土を超えて拡大すると、その国境線内に住むもの全員は各地域の住民の数的和にすぎず、故郷としての地域に対する愛着や忠誠を越える一体性をどう担保するかは、近代国家が直面する大きな課題であった¹⁰⁾。

このような近代的国民概念は想像上の観念として歴史的に構成されていったとベネディクト・アンダーソンは考えた。その著書の中でアンダーソンは、それを「想像の共同体(imagined community)」と呼び、普段出会うことのない他人が自分と同じ共同体に属しているという観念が想像上に存在することが、近代国民国家の形成にとって決定的な役割を果たしたと主張した。この観念は15世紀に開発された活版印刷技術の発展と出版物の浸透とともにゆっくりと形成されていった¹¹⁾。アンダーソンがその役割の中心においたのは文学と新聞である。文学において、一場面一場面に登場する人物の関連が必ずしも文字による描写からは直接論理的に結びつくとは言えないが、その登場人物が「『社会』・・・にはめこまれ」(アンダーソン邦訳 51頁)で、また「全知の読者の頭の中にはめ込まれ」(同上)ることによって、相互に関連し合っているという想像が読者の頭の中に構成されると考えた。アンダーソンは例としてバルザックの小説をとりあげる。その小説の主人公には妻以外に愛人があるのであるが、その愛人に

は別の情夫がいる。しかし小説の中で主人公と愛人の情夫が出会うことはなく、存在することすら気づいていない可能性もある。ところがこの二人が同じ社会に属しているという想像によって二人の見知らぬ他人同士は観念の中で関連づけられる。同時にこの二人の登場人物は物語全体を見渡せる読者の頭の中にはめ込まれ、読者が登場人物間のつながりを想像上に思い描くことになると、アンダーソンは言うのである。また新聞について言えば、読者が実際に会うことのない見知らぬ他人が引き起こす出来事についての記事を読むことによって、その出来事が、読者自身も共有している同時代（新聞発行の日付を共有している）の、同じ共同体における出来事であると日々再確認されることになる。この二つの現象は、印刷の発展と出版の拡大によって、多数の人々へと広がってゆき、何百キロも離れた人々を観念の中で結びつけるようになって行く。そして、読者とは無縁の遠く離れた人物であっても、またたとえ虚構の人物であったとしても、新聞や小説に登場する人物が読者にとって無縁ではない人物と想像されることが、雑多な地域住民を国民としてまとめる上で大きな働きをしたと、アンダーソンは主張する。そのために言語が決定的な役割を果たしたことは彼の「言語によって創造された共同体」という言葉によっても明らかである。（アンダーソン邦訳 239頁）。

また社会学者ピエール・ブルデューは、標準言語が国民の創成にとって必須のものであると述べている。

「国民 (Nation) という、法律に根拠を置くだけのまったく抽象的な集団が創られる際には新たな用法や機能が生まれるわけだが、そのときになって初めて標準言語が必須の重要性を帯びるのである。標準言語は、それが使われる公務文書と同じように、没個性で特長がないが、言語慣習 (linguistic habitus) の生産物を規格化するという任務をも遂行するのである。」 (Bourdieu, p.48)

国民という様な存在は、同様に一様で没個性の標準言語により形成・強化されるとブルデューは言う。また、標準化、規格化は辞書などの言語資源の作成を通して行うが、その結果標準言語はその規格化された性質から「さまざまな拘束の外側にあり、状況の助けを借りなくとも機能するため、おたがい

全く知らない発信者と受信者が送付したり、解読したりするのに適して」 (Ibid.) いるのである。

エリザベス朝時代にはすでに、詩を中心とする文学は英語で書かれていたが、詩の指南書の中で、詩作において「宮廷の日常の話し言葉、ロンドンの言葉、ロンドン近郊60マイルを越えない範囲の言葉」を使うように主張されており¹²⁾、書き言葉統一への動きはあったものと思われる。だが、先に触れたようにエリザベス一世の後を継いだジェームズ一世の命によって英語訳された『欽定訳聖書』の印刷・出版によって、中央集権化する国家権力と国家宗教としての英国国教会のイデオロギーが、印刷された東部ミッドランド方言（それは権威あるイングランド語[英語]としての地位を手に入れた）を通して英国全土に運ばれていくことになった。

印刷の発展や出版点数の増加とともに、徐々につづりの統一が図られるようになった。活字を組む場合につづりがばらばらだとはなはだ効率が悪いからである。またロンドンにおける商取引が盛んになるにつれてますます使われる英語の基準はロンドンを中心とするようになった。出版印刷業が、人口密集地であり権力中枢でもある首都ロンドンを中心に発展していったことは言うまでもない。当然ロンドンにおいて力を増し、影響力を増していった商人階級の方言が「その富を用いて土地を購入し、権威と政治的存在感を増して」 (Holborow, p.158) いった。ここで注意しなければならないのは、方言を含む口語は書記言語と関連し合うが、異なる規則を持つ別個の言語であるということである (Ibid. p.155)。我が国に引きつけて考えても、関西方言（それ自体も多数の地域方言に分かれているが）には書記言語はなく、共通語の論理で関西方言の語彙を並べても正しい（何が正しいかは議論の余地があるが）関西方言を話すことはできない。そして、関西出身者が関東の会社に就職した場合、そこで関西方言を使い続けるかどうかは選択の問題である。また地域方言の中には、階級方言、職業方言などが複雑に混じり合っており、地域方言使用者は日々、複雑な言語選択を迫られている。これらの選択は使用者の置かれた社会的地位などの文脈と戦略的な判断によって行われるのであり、それは広い意味で政治的な選択であると言ってもよい。したがってどのような方言を標準語として設定するかは政治的、イデオロギー的な問題である。そしてある方言が書記言語（印刷言語で

もある)を持った場合、その方言の読み書き能力を有する者が決定的な優位性を獲得することになる。

18世紀は、戦争に明け暮れた時代だが(フランスとの戦争は第二次百年戦争とも呼ばれた)、それを背景に英語について激しい論争が繰り広げられたと社会言語学者のトニー・クロウリーは主張し、その議論を詳細に跡づけている(Crowley 1996; Chapt. 3)。その議論の中心は、一つのネイションと共通言語をめぐるものである。言語の乱れを嘆くと同時に、後に大陸においてドイツの哲学者ゴットフリート・ヘルダーが主張した共同体と民族、言語の一体化を先取りする形で、民族性と言語のつながりが主張された(Ibid. pp.67-68)。そうした潮流の中で著述家トーマス・シェリダンは、イングランド人と異なる言語を話し、「全くかけ離れた考え方をもち、自然と異なる利益を追求して」いるスコットランド人、ウェールズ人、アイルランド人との「完全な一体化を達成するためには、・・・一つの共通言語を行き渡らせること以上に効果のあるものはない」(Ibid. p.68に引用)と論じた。

そのほぼ同時期にサミュエル・ジョンソンの『英語辞典』(*A Dictionary of the English Language*, 1755)が出版された。印刷技術の発展・拡大と書籍出版の増加についてはすでに触れたが、前出のアンダーソンによると17世紀には出版業は驚異的な成長を遂げる産業となり、ヨーロッパの各地に支店を出すほどの国際的な書店(印刷・出版を兼ねている)が現れていた。また17世紀には各国で学術の組織化が行われ、国家単位でアカデミーが創設された。フランスでは標準語問題はアカデミーで検討されたが、英国では結果的には個人の手にゆだねられることになった。辞書出版の目的は「発音が・・・固定され、・・・語の純粋性が保持でき、用法が確定的なものとなり、語の命が長くなること」(Leith, p.238に引用)であり、チョーサー、詩人スペンサー、シドニー、シェイクスピアなどの前世紀までに活躍した文学者の詩や戯曲、フランシス・ベーコンなどの文人・哲学者などの著述に見られる書き言葉を取り入れ、「労働」や「商売」に従事する階級の言葉は避けられた(Ibid.)。またジョンソンはできる限り語源の記載に努め、英語がギリシャ・ラテンの古典と伝統でつながっていることを示そうとした(Leith, p.239)。ジョンソンの辞典の出版によって、文学的な書き言葉が英語の精髓とされ、「紳士」であるためには学ばなければ

ならない規範として書物の中に固定されることになった。さらに、ジョンソンの辞典の出版後に続々と出版された英語文法書¹³⁾は英語のあるべき姿を教化することを目的にしたものであるが、ジョンソンの考えを受けた規範的な姿勢に貫かれており、ときには無理矢理一つの形を押しつけることになった。こうして標準英語の成立のための準備が整った。

しかし標準英語の成立が単線的に推進されていったとは考えられない。当時は、有力階級の師弟のためのグラマースクールなどをのぞき、初等・中等学校はなきに等しかった。そのため貧しい人々は読み書きができたとしても、その力は初歩的なものでしかなかった。また、当時私塾は各地に散在していたが、その学費は週2ペンスから6ペンスかかり、「多くの人々にとってその収入からみて相当な出費」(ワット邦訳52頁)であった。またサミュエル・ジョンソンが手本とした文学はラテン語やフランス語を語源とする語彙を多分に含む前世紀までの古典的な詩や戯曲であったが、勃興しつつあった18世紀の中産階級の人々にもすでに難解なものとなっていた。しかし世紀が進むにつれ、新しいタイプの文学形式が生まれるようになってきた。小説(Novel)と呼ばれるようになったこの文学形式は、日記や手紙、自伝などを模して語られ、現実起こったことをそのまま伝えるという形式(もちろん架空の物語であるが)をとり、それほど難解ではない語彙を用いて書かれたものであった。すでに、ブロードサイドと呼ばれる新聞形式の小冊子に慣れていた人々は、波瀾万丈の冒険物語(『ロビンソン・クルーソー』や部屋付き女中についてのゴシップ的な内容(『パメラ』)の連続物語に夢中になった。当時書籍はとても一般庶民に手の届くものではなかったが、公共の巡回図書館の誕生によって、分冊形式で安価に借りることができるようになったために、庶民であっても字が読めれば手にすることが可能となった。読者たちは、信じられないような冒険をしたクルーソーや男主人から迫られる貞操の危機を何とか乗り切ろうとする純真な部屋付き女中パメラに対して、アンダーソンの言葉を借りると、「同時代に生きるとともに同じ共同体に属する同胞」として共感したのである¹⁴⁾。新聞と小説という二つの近代的な文化メディアが同時に興隆・発展していったことには強い関連と大きな意味があるのである。そして19世紀に入ると小説は爆発的に人気を博するようになり、詩

に変わって主要な文学メディアとなり、「国民文学」として国民国家形成の中核になることになる。

3. 標準英語の成立

ジョンソンは『英語辞典』においてつづりの統一に努めたが、標準英語の成立には発音も重要な要素であった。18世紀の後半には発音が注目され、参考書も出版された (Leith, p.54)。特権階級の子弟のためのパブリックスクールでは東部ミッドランド方言が教授言語として使われていたが、徐々に地方色は失われていった (Leith, p.54)。この発音はジェントルマンの指標となるため、力をつけてきたといっても、まだ独自の文化を確立しておらず、不安定な立場にあると感じていた新興の産業資本家や有力商人たちは、下の階級と自己を区別し、貴族など上流階級の社交の輪に入るためには、アクセントが重要であった。なぜならアクセントが、人々を区分する最もわかりやすい指標でもあるからである。もともと標準語を設定するときに対立するのは地域の方言であるが、この東部ミッドランド方言と鋭く対立したのはロンドン方言であった。産業革命を経て急速に進化した産業資本主義は、膨大な労働者を都市部、特にロンドンに吸い寄せることになった。読み書き教育が不十分で、技術のない人々はロンドン港湾地区周辺やテムズ川の南に集住することになった。それらの人々はコクニーと呼ばれる独特の方言を話した。一般に標準言語が確立するときに対比されるのは、地域方言であるが、標準英語が形成されるにあたって、対比されたのは同じロンドン地域で使われているコクニーとなった。コクニーは主にロンドンの労働者によって話されたため、この2つの方言は地域方言であることをやめ階級方言となった。

こうして標準化された東部ミッドランド方言は「クィーンズ・イングリッシュ (Queen's English)」と呼ばれることになった。この言葉によって国家と言語の一体化が、つまり「国家語」が、完成したことになる。『クィーンズ・イングリッシュへの請願 (Plea for the Queen's English)』(1876)の中で当時のカンタベリー教会司祭は、クィーンズ・イングリッシュは「いわば、この国の思想、弁舌の常道であって、我々が共通に持つ利害の中心にはこの領土の主権者がおられ、我々の市民的義務の源泉であるとともに、市民的権利の中心でもあると考えること

である。つまり、クィーンズ・イングリッシュとは意味のない言葉ではなく、我が国語について数々の有益な教示を与えてくれ、何が正しい用法であり、何が誤用であるかを教えてくれる」(Crowley 2003, p.110に引用)と主張して、「クィーンズ・イングリッシュ」という言葉を使うよう訴えた。そして、この言葉が広く英国中に、また国境を越えて世界中に広がることになったことは周知の通りである。

このクィーンズ・イングリッシュつまり標準英語は、もはや一地域の言語ではないと考えられた。一般にロンドンと結びつけられる方言はコクニー (Cockney) である。しかし当時コクニーはいくら教育しても、地方性が抜けないが、「標準英語は、現在では地域方言であるよりも、階級方言であり、ブリテン島に住むすべての教育ある人びとの言語である」とされた¹⁵⁾。同時にそのことは、さまざまな地域方言や階級方言が標準英語から外れた「欠陥」のある劣った言葉とされることになった。また方言には書記法がないため、文学や論述、科学、学問などにふさわしくない一段低い日常の言葉とされるようになる。欠陥の烙印は言葉だけに押されたわけではない。欠陥のある言葉は、その使用者の生活スタイル、道徳を反映しているととらえられスティグマ化されていった。反対に標準英語は、正しい生活、よい出身、よい教養を表しているととらえられるようになった。こうして方言の標準英語は一方言ではなく、欠けることのない「言語」としての地位を獲得したのである。

19世紀後半の支配層が直面したのは、標準英語を使って、労働者階級を「文明化」し、さらに英帝国の威光で植民地世界を「文明化」することであった。19世紀を代表する歴史家であり、同時に植民地インドにおける教育制度立案に加わったトーマス・マコーレー (1800~59) は「上流階級と中流階級が人類の生まれつきの代表」(Holborow, p.166)であり「低い階級」と対立し、自分たちが支配する階級であるという自覚を強く持っていた。労働者子弟の教育について当時の識者ロバート・ロウは次のように述べている。

「下層階級の人びとは彼らに与えられた義務を果たすように教育されるべきである。彼らはまた彼らが出会うより高級な教養を理解し、敬意を表するように教育されるべきである。また、上流階級の人び

とは、それとまったく異なる教育を受けなければならないのであって、下層階級の人びとに高度な教養が示された場合彼らがそれに屈服し、敬意を表するようにその教養を示すことができなければならないのである。」（ウォードル邦訳45頁に引用）

18世紀後半にはパブリックスクールには、すでに中流階級の子弟が一定数入学していたが（安川 226頁）、1830年代に制度化され、ジェントルマン教育の中心となると、「他の階層との差別化、つまり社会的排他性と再生はいっそう強められ、・・・共通の教育によって、仲間意識や連帯感が息子および親たちに醸成・獲得され、社会的文化的同一性が獲得」（同上）されることになった。彼らは寄宿生活を送り、エリートの仲間意識とコネクションを広げていくために、学校対抗の集団スポーツが奨励された。そして生徒たちは、卒業する頃には教養とともに、現在RP（容認発音）と呼ばれているエリート特有の発音を獲得するのであった。

同時に、産業資本は低賃金で働く膨大な労働力をも必要とした。労働者階級には基礎的な読み書き能力を培うことが求められていた。しかし、19世紀の半ばでも平均して1年から2年間の初等教育で学校教育を終えるものが半数近くいた（ウォードル邦訳101頁）。しかし恵まれない状況の中でも労働者の三分の二は、その程度は様々であったにせよ、文章を読む力もっており、支配層の思惑とは逆に、自己教育に努め、労働者の発言を押さえつけようとする法律の制定にもかかわらず、発言力を徐々に強めていった。その中で試験などのスクリーニングによって選り出した人材を技術教育を通して中間職種につけていく必要があった。産業の発展は、技師、事務職、職長などの一定の知識と技術を持った人々を必要としたからである。他方、支配階級による支配が正統性を持つことを労働者が受け入れるよう同意を取り付けることが重要であった。このような矛盾した課題を英国支配層は抱えていたのである。

パブリックスクール、ラグビー校校長トーマス・アーノルドの息子マシュー・アーノルドは英国だけでなく我が国の教養観にも大きな影響を与えた著書『教養と無秩序（*Culture and Anarchy*）』（1867～8）において、封建主義から解放された労働者は個人の自由を求めるようになったが、自由そのものを求めることは無秩序に向かうという懸念を表明した^{16）}。

それに対して、実際の教養は「共同体の正しい理性を集約し、状況に応じてこれを強力に発動する国家」とともにあると彼は主張した。劣悪な状況に置かれた労働者による労働運動の高まり、1848年の革命的状况を目の当たりにし危機感を持ったアーノルドは、中産階級を重視しながらも、階級を超えた「ヒューマニティ」を求めている。しかし、同時に彼の立論から言うと、「ヒューマニティ」が国家を超えることはない^{17）}。これは言葉を変えると、労働者を「国民」に編入するための呼びかけであったとも言える。標準英語を共有し、小説や新聞を読み、中産階級の文化・教養を身につけることが「国民」になる条件であれば、労働者は「国民」からははずれることになる。これはアンダーソン的な意味において「国民」になること、もちろん日が沈むことのない帝国としての国家の「国民」になることを求める主張ではないだろうか。

小括

ここまで駆け足で標準英語の形成過程をたどってきたが、不十分ながら明らかになったことは、標準英語は没個性で誰でも使えるという側面が強調される一方で、誰もが目指すべき理想の言語という体裁をとっているが、それは階級区分を壊したり、超越するようなものではなく、逆に階級の違いを強調するという面も保持するという矛盾した性格を持っていることである。一方、「国民」も同様に矛盾を抱えたままである。「国民」は遠くにいる同国人を同胞と「想像」できるという点で一樣であり、その「国民」を代表するのが「国家」であるわけだが、その「国民」からは多くの人びとが漏れ落ちていた。労働者は一例であるが、ユダヤ人・ジプシーなど異教徒や少数民族は「国民」ではなかった。また参政権を持たないという意味では女性も対等の存在ではなかった。「国民」概念は、不可避免的に「二級国民」や「非国民」を陰画として生み出す。

Standardという語には、均一化という意味と基準という意味があることはすでに触れたが、コクニーを唾棄すべき下等な言葉としてスティグマ化しその対極に標準英語を置くという場合には、上の意味以外にプレステイジ（Prestige）^{18）}という価値判断が加わり、本来のstandardの意味からは逸脱するのである。英語辞書のstandardの項を引いてもこの意味は

載っていない。英語そのものにプレスティジの有無があるわけではない。プレスティジは人間がある集団や高級品などの製品に与える権威 (Milroy, p. 532 参照) であり、社会的・歴史的に形成されるものである。すでに述べたように、言語構造が中空に抽象的に存在しているわけではなく、言語はあくまで人間が社会の中で使うものであり¹⁹⁾、また方言はある地域・階層などの人間集団が使うものである以上、公認された基準方言としての標準英語も何らかの価値判断が伴うことになる。標準英語にはスティグマの対極のプレスティジが与えられ「威信・威光」を伴うことになった。それは同時に選ばれた者のみが入れるエリート集団に加盟するための入会券のようなものとなる。その集団の中に生まれついていない場合、長い教育期間と難しい試験を突破しなければこの入会券を獲得することはできないのである。

標準英語が威信を維持するためには「標準」たり得ないという矛盾をもつ。標準英語には東部ミッドランド方言としての特長が保持されており、例えば *different from* が正用法とされ、他の地域方言では許容される *diferent to* や *diferent than* は誤りとされる (Leith, p.52)。標準英語の特長は方言との語彙や文法的な違いそれ自体であるよりも、違いに対する不寛容さである。標準英語には、さまざまな些末と言ってもよい相違や英語文法の論理からはおかしいともいえる特徴を備えており²⁰⁾、その差違を克服しない限りエリート集団への入会券は獲得できない。標準英語を完璧に読み書きする者は標準的な英国国民というよりも、教養・文化 (Culture) を身につけた英国ジェントルマンであり、国家の中核を担う人物像であり支配層の価値観を反映するモデルとなった。標準英語を学ぼうとしながら、そこに到達できないで不完全な英語を読み書きする者はそれに従うべきであるとされた。もちろん英国「国民」への入会券はそこまで高くないが、明治時代の日本に華族・士族・平民・新平民という法律化されていないにもかかわらず制度化された区分があったように、19世紀の英国にも「国民」と「標準英語」によって事実上区分された様々な階級・階層が成立していた。

こうして成立した標準英語は教養・文化とともに、英帝国の様々な植民地へと運ばれ、その地のエリート養成に活用されることになる。インドでは、前出のトーマス・マコーレーが「血と色はインド人でありながら、嗜好、意見、道徳、知性においては英国

人」(Leith, p.204に引用) であるような階級を作り、英語を話す支配者と支配される者の間の通訳となることができるよう英語教育を行うことを主張した²¹⁾。この目的に標準英語ほどふさわしいものはないだろう。こうして、英語は英国内の不均等を拡大した形で海外植民地に輸出することになったのである。

注

- 1) グラッドル1999邦訳 33頁、Crystal, p.3による。
- 2) 英米以外の2校のうち1校はカナダなので19校が英語国の大学であり、唯一の例外はスイスである。ただし、ランキングを決めるための基準やデータは、英語国やヨーロッパ以外にはきわめて不利になっているように思える。(このランキングの引用部門のデータを提供しているトムソン・ロイター社の引用雑誌データベースに日本語の学術雑誌が含まれているのだろうか?) *The Times Higher Education World University Ranking 2014*, <http://www.timeshighereducation.co.uk/world-university-rankings/>参照。
- 3) バーチフィールド邦訳 209頁。
- 4) 1997年キッシンジャー財団議長David Rothkopfの言葉。Phillipson 2010, p.107に引用。
- 5) 言語学者Joshua Fishmanの言葉。フィリップソン 91頁に引用。
- 6) フィリップソンは言語帝国主義 (Linguistic Imperialism) を一般概念とし、英語帝国主義 (English Linguistic Imperialism) を言語帝国主義の英語での表れとして論じているが、著書の対象が英語であるのでほぼ同義ととらえてよい。
- 7) またフィリップソンに対する批判はCorcoranに手際よくまとめている。
- 8) *standard*の語義には、守るべき基準という意味と製品などの均一化という意味がある。本稿においては、Standard Englishを「均一化され基準となったイングランドの公認方言」という程度の暫定的な作業定義で論じる。以下を参照。Milroy, pp.530-531, Crowley 2003, pp.77-78.
- 9) それまでにも聖書の英訳は複数回試みられてお

り、なかでも16世紀中期のティンダル聖書は優れた訳で欽定訳聖書にも多くの表現が流用されているが、欽定訳は国家が公認したという点で画期をなす。

- 10) 「国民」概念については、小坂井、佐藤、塩川を参考にした。
- 11) 15世紀に発明された活版印刷技術と書籍出版は16世紀から17世紀にかけてヨーロッパ中に急速に普及発展していき、100年間で1億500万から2億冊の書籍が出版されたと推測される。アンダーソン邦訳、60～61頁。
- 12) エリザベス朝時代の著述家George Puttenham (1529 - 1590)のThe Arte of English Poesie中の言葉。Crowley 1996: p.55に引用。
- 13) それは伝統的なラテン語文法の用語を英語に転用したため英語の実情に合っているとは言えなかった。Leith 1997, p.52。
- 14) 『ロビンソン・クルーソー』は現実の難破事件をモデルにしており、『パメラ』は手紙形式で書かれているため、それが嘘か真実かは当時の人々にとってわかりようがなかった。その意味では、当時の人々にとってノヴェルも新聞も大して変わらなかったとも言える。
- 15) バーナード・ショウの『ピグマリオン』に登場するヒギンズ教授のモデルとなったHenry Sweetの言葉。Holborow, pp. 167-168に引用。
- 16) Redfield, p.14を参照。
- 17) アーノルドは国家と文化の一体化を主張した。文化がばらばらの階級をまとめてくれるのであるとも述べている(前掲Redfield p.14)。なお、「文化 (Culture)」は「文明 (Civilization)」とともに、18世紀に国民概念とともに形成された概念であり、国家イデオロギーとして機能しているという有力な説があるが、ここでは検討する余裕はない。西川論文を参照。
- 18) 威信、名声、名門などと訳される。例えばprestige school (名門校)。
- 19) ソシュールの言語観はそうである。Bourdieu, p. 44。またHolborow, Chapter 2を参照。
- 20) 例えば、英語ではdoを本動詞としてだけでなく助動詞としても使うが、英語文法の論理から言うと助動詞は三人称単数現在であっても形が変わらないはずである。しかし標準英語においてはDoes he go? が正しいとされ、Do he go? は

誤りとされる。これは東部ミッドランド方言の特長が標準英語に持ち込まれたからである。詳しくは、Trudgillを参照。

- 21) そうして完璧な英語と教養を身につけたインド人エリートが英国エリート社会に受け入れられることはないのである(アンダーソン邦訳155～156頁)。

参考文献

- Bourdieu, Pierre. 1991. *Language and Symbolic Power*. Cambridge, UK: Polity Press.
- Canagarajah, Suresh. 2013. *Translingual Practice*. New York: Routledge.
- Corcoran, James. 2009. Linguistic Imperialism and Political Economy of Global English Language Teaching. Prepared for delivery at the 2009 Meeting of the Latin American Studies Association, Rio de Janeiro.
https://www.academia.edu/7011774/Linguistic_Imperialism_and_the_Political_Economy_of_English_Language_Teaching
- Crowley, Tony. 1996. *Language in History: Theories and Texts*. London and New York: Routledge.
- Crowley, Tony. 2003. *Standard English and the Politics of Language 2nd. Ed.* London: Palgrave.
- Crystal, David. 2000. Emerging Englishes. *English Teaching Professionals*. Jan.
- Davies, Alan. 1996 Review Article: Ironising the Myth of Linguicism. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*. 17/6. pp. 485-596.
- Edge, Julian, Ed. 2006. *(Re-)locating TESOL in an Age of Empire*. London: Palgrave.
- Holborow, Marnie. 1999. *The Politics of English*. London: SAGE Publications.
- Leith, Dick. 1997. *A Social History of English (2nd Ed.)*. London and New York: Routledge.
- McRum, Robert. 2010. *Globish: How English Became the World's Language*. New York: Norton.

- Milroy, James. 2001. Language Ideologies and the Consequences of Standardization. *Journal of Sociolinguistics* 5/4, pp.530-555.
- Phillipson, Robert. 1992. *Linguistic Imperialism*. Oxford, U.K.: Oxford University Press.
[ロバート・フィリップソン著、平田雅弘他訳『言語帝国主義』 三元社、2013]
- Phillipson, Robert. 2009. *Linguistic Imperialism Continued*. London and New York: Routledge.
- Redfield, Marc. 2003. *The Politics of Aesthetics: Nationalism, Gender, Romanticism*. Stanford, USA: Stanford University Press.
- Trudgill, Peter. 1999. Standard English: What It Isn't, Tony Bex et.al. eds, *Standard English: the Widening Debate*. London: Routledge. PP. 117-128.
- Wallace, David, Ed. 1999. *The Cambridge History of Medieval English Literature*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Watt, Ian. 1963. *The Rise of the Novel*. London: Perigrine Books.
[イアン・ワット著、藤田永祐訳『小説の勃興』 南雲堂、2013]
- アンダーソン、ベネディクト、1997. 白石さや他訳『想像の共同体(増補版)』 NTT出版
- ウオードル、デヴィッド、1979. 岩本俊郎訳『イギリス民衆教育の展開』 協同出版
- ウォルフォード、ジェフリー、1996. 竹内洋他訳『パブリックスクールの社会学』 世界思想社
- グラッドル、デイヴィッド、1999. 山岸勝栄訳『英語の未来』 研究社出版
- 小坂井敏晶、2011. 『増補 民族という虚構』 ちくま学芸文庫
- ホブズボウム、エリック、テレンス・レンジャー編、1992. 前川啓治他訳『創られた伝統』 紀伊國屋書店
- ホブズボーム、E・J、1981. 柳父圀近訳『資本の時代 1848-1875 (1)』 みすず書房
- ホブズボーム、E・J、1993. 野口建彦他訳『帝国の時代 1875-1914 (1)』 みすず書房
- マクラム、ロバート他、1989. 岩崎春雄他訳『英語物語』 文藝春秋社
- 佐藤成基、2004. 「国民国家とは何か」『茨城大学政経学会雑誌』 第74号、2004. 27-43頁
- 塩川伸明、2008. 塩川伸明『民族とネーション』 岩波書店.
- 西川長夫、1993. 「国家イデオロギーとしての文明と文化」『思想』 No. 827 1993. 4-33頁
- 安川哲夫、1995. 『ジェントルマンと近代教育』 勁草書房.